

言語学、はじめの一步（3）

この4月に本学に入られた新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。この図書館報に手に取られた今、新しい環境にも少し慣れた頃ではないでしょうか。この「言語学、はじめの一步」は、入学先生と藤井の二人が、Q&A形式で言語学を分かり易くご紹介しようと始めました。今回は第3回目になりますが、前回までは前書きの様な導入部分でした。今回から、いよいよ本題に入ります。なお、前回までをお読みになりたい方は、図書館でバックナンバーを入手するか、図書館のホームページから「デジタル図書館報」をご覧ください。186号から連載しています。

Q：まず初めに質問です。このシリーズのタイトルは「言語学、はじめの一步」ですが、「英語学」という呼び方もよく耳にします。言語学と英語学はどう違うのでしょうか？

A：英語学というのは英語を言語学的に研究する分野ということです。つまり、研究対象の言語が英語なら英語学、日本語なら日本語学などと言ったりするわけです。ただ英語ではEnglish linguisticsという言い方は余りせず、どの言語の研究であろうとlinguisticsと呼ぶのが普通です。英語は最も研究が進んでいる言語ですし、日本でも英語の研究者は沢山いますので、特に「英語学」という言い方をするのだと思います。

Q：なるほど。確かに図書館にも『日本語学』というタイトルの雑誌がありますね。では言語学にはどのような分野があるのでしょうか？

A：言語学の研究分野は一般的に音声学、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論、それに英語史や日本語史のように各言語の歴史を研究する領域に分けられます。

Q：では今回は音声学と音韻論についてそれぞれの内容を簡単に紹介していただけますか？

A：我々は言葉を発するとき口から音を出します。これを言語音と言います。この言語音を研究する分野が音声学と音韻論です。

Q：音声学と音韻論はどのように違うのでしょうか？

A：音声学は音声を物理的に観察することに焦

点が置かれます。例えば、日本語の「ア」という音を発したとき、口の形はどうなっているか、舌の位置はどこにあるのか、ということの問題としたり、コンピュータを用いて音声分析を行ったりします。また音声学では英語のpinとspinの[p]の音はまったく別の音として区別します。前者は息息を伴いますが、後者は息息を伴いません。一方、音韻論は各言語の音の体系を抽象レベルで理論的に研究する分野です。例えば英語ではstreet[stri:t]のように単語の初めに子音が3つ連続する場合は、一番目には必ず/s/が来て、次に/p, t, k/のどれかが現れ、三番目には/l, r, w, j/のいずれかが来るのが分かっています。また単語のアクセントの位置に関して規則を立てて説明するというのも音韻論の分野で扱われます。

Q：では最後に各分野について学べる概説書のようなものと音声学・音韻論の解説書を挙げていただけますか？

A：はい。全体が学べる入門書としては本学英米語学科教授の小野隆啓先生が監修をされた『英語の構造－その奥に潜む原理－』小野隆啓監修、金星堂(2004年)です。本書は英語学の諸分野について基礎的な内容が詳しく解説されています。また数ページ毎に掲載されているA Tip for Thinkingというコラムも興味深い内容で大変勉強になりますよ。音声学・音韻論の分野では『音声学・音韻論』窪園晴夫著、くろしお出版(1998年)を挙げておきたいと思います。

今回取り上げた参考文献について

『英語の構造－その奥に潜む原理－』の請求記号は830.1-Eigoで、本館の第1閲覧室に配架されています。

『音声学・音韻論』の方は830.7-Nich-1で、本館の地下書庫に配架されています。是非、ご一読下さい。

にゅうがく なおや

(大阪大学非常勤講師・英語学・英語史)

ふじい たつや (司書・係長・アジア関係図書館)